

号域であり、内部に不均一な線状構造を認めた。興味深いことに、SPECT (ECD) では RI 高集積を示し(通常、腫瘍病変では RI 集積低下となる)、脳血管撮影では本疾患としては数少ない hypervascular であった。摘出術を施行し、確診を得た。hypervascular な本症例が CT, MRI では造影効果を示さず、しかも上記 SPECT (ECD) 所見を呈したことから、本疾患においては BBB 及び脳内エステラーゼ活性が正常に保たれていると推定された。このことは、本疾患が新生物よりも過誤腫的色彩が強いことを示唆する傍証となり得るものと考えられた。

B-11) 人硬膜の血管構造 (VTR)

田中 輝彦 (青森県立中央病院
脳神経外科)

人硬膜(剖検材料)につき、中硬膜動脈および蝶形頭頂洞にカニューレションし、温生食水で洗浄した後、色素、血液、Ba 液などを注入して、その流通状態を観察した。硬膜表面には多数の吻合動脈と骨への小分枝があり、硬膜内面には無数の柵状に配列した毛細血管群が認められ、Kerber (1973) らの記載と一致した。また、一側動脈への色素注入で、対側の硬膜内面の柵状血管も認められた。更にクモ膜顆粒は、硬膜の血管から独立しているものと思われた。静脈は内層において数本の毛細管から流入した小斑状の形態を示し、それらが集合して、大きな斑状静脈となっていた。硬膜表面では、やはり骨からの流入小静脈とともに、巨大な静脈洞様構造を示し、硬膜動脈に伴走する静脈は硬膜静脈のごく一部にしか過ぎないと思われた。[結論] 硬膜には動静脈、毛細血管などが豊富に存在することが判明した。

B-12) 予期せぬ術中破裂をきたした術前診断困難な ICA-dorsal チマメ状動脈瘤の 2 症例

福田 修・遠藤 俊郎 (富山医科薬科大学)
長堀 毅・高久 晃 (脳神経外科)
斎藤 隆景 (斎藤記念病院
脳神経外科)

合併した未破裂動脈瘤を破裂動脈瘤と考え手術したところ、術前診断できなかった ICA-dorsal 動脈瘤から premature rupture をきたした稀な 2 症例を経験したので報告する。【症例 1】53才、男性、day 0, Hunt & Kosnik 2, Fisher 3. 血管写上、右 A1 にのみ動脈瘤

を認めた。術中所見：前頭葉圧排直後に ICA より大出血したため、血流遮断しながら ICA-dorsal のチマメ状動脈瘤に、wrapping を行った。A1 の動脈瘤は、未破裂であった。独歩退院した。【症例 2】68才、男性、day 0, Hunt & Kosnik 2, Fisher 3. 血管写上、右中大脳動脈に動脈瘤を認めた。術中所見：シルビウス裂を開放中に ICA より大出血したため、血流遮断しながら ICA-dorsal の小孔に coating を行った。右中大脳動脈瘤は未破裂であった。術後左片麻痺を残した。

B-13) 非手術的療法により消失した IC dorsal blister aneurysm

今泉 茂樹・大和田健司 (岩手県立胆沢病院
脳神経外科)

[仮説及び動機] IC dorsal blister aneurysm の治療は、種々の clipping における工夫が報告されているにもかかわらず、いまだ確立したものが無い。一方、同動脈瘤の病理所見のいくつかの報告は、解離性=dissection による発生機序を示唆している。後頭蓋窩における解離性動脈瘤治療において feeder artery の clipping による動脈瘤血栓化が行なわれていることから、今回我々は企図的に手術を行わず、保存的薬物療法のみを行なった。その結果、SAH 発症半年後の angiography にて完全に消失した IC dorsal blister aneurysm の 1 症例を経験したので報告する。

[症例] 52歳、女、'96/9/11 発症の SAH. H-K grade 2, Fisher 3, Angio で C1~C2 portion dorsal やや内側に blister anerysm を認めた。直後より carbazochrome sodium sulfate 400~200 (10日後から) mg/day, tranexanic acid 4,000~2,000 (10日後から) mg を点滴静注。11/30 退院後は前者 30 mg, 後者 1,500 mg を内服した。spasm 予防薬としてのトロンボキサン合成阻害剤などはあえて使わなかった。

'97/3/12 の angiography にて完全な脳動脈瘤の消失を認めた。

[結論] 完全な clipping の後、rebleeding により失うこともありえる本症においては、1つの治療法の option としての本法の有用性を提唱したい。